



TITLE:

# 旅歐中國共產主義青年團の成立 (創立五十周年記念論集)

AUTHOR(S):

森, 時彦

---

CITATION:

森, 時彦. 旅歐中國共產主義青年團の成立 (創立五十周年記念論集). 東方學報 1980, 52: 645-680

ISSUE DATE:

1980-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66573>

RIGHT:

# 旅歐中國共產主義青年團の成立

森 時 彦

はじめに

一、李璜の圖式

二、諸説の整理・検討

三、伍豪執筆文書

四、残された若干の問題

むすび

## はじめに

初期中國共產黨史の分野においては、一つの史實をめぐる、諸説紛紛たる狀況が、むしろ常態であるといつてもよい。第一次全國代表大會の開催期日ですら、七月一日を主張する中國共產黨の公式見解と、それに疑いをさしはさむ諸説との對立があったことは、まだ記憶に新しい。

このような論争がおこるのも、第一次資料が決定的に缺如しているいまの段階では、むしろ當然のことかもしれない。だが、問題は、時期の確定という一見考證學的な論争が、共產黨史の分野では往々にしてそれだけで終らないところにある。論者の共產主義に對する立場が、事實の把握につよく作用し、その結果、たんなる事實の確定という問題が、中國共產主義そのものに對する評價の相違にまで、龜裂を深める場合もでてくるのである。

この小論で検討する旅歐中國共產主義青年團の成立時期という問題も、その一例である。その成立時期の確定は、たんに實事求是の精神を満足させるためだけになされるのではない。それは、初期中國共產主義運動の鼎足の一にかぞえられているフランスでの共產主義運動が、いかなる経過をへて形成されたのか、すなわち、一部の人々が言うように、徹頭徹尾コミンテルンの傀儡としてあったのか、それともフランス勤工儉學運動の必然的な發展の結果としてあったのかという疑問を解明する糸口をうることをめざしている。フランスにおける中國人共產主義運動の勃興に對する二つのまったく異なる見解は、小論の分析を通じて、いずれか一方がその論據の重要な部分をうしなうことになるであろう。

## 一、李璜の圖式

筆者はさきに、「フランス勤工儉學運動小史」上・下（『東方學報』第五十、五十一冊所收）と題する小論で、五四運動前後に隆盛をみたフランス勤工儉學運動の意義を論じた。そこでの筆者の觀點は、この運動をたんに中國留學史の一齣ととらえるのではなく、五四運動の一環としての位置づけを與え、その深化、發展が中國共產主義の源流を生みだしたとするものである。

勤工儉學という理念自體は、窮極においては肉體勞働と頭腦勞働の一致という至高の理想を、目ざすものではあったが、五四前後における中國の社會狀況の中で、それが青年たちの心をひきつけ、二千名にも垂んとする青年たちをかりたてて、一つの運動を形成していった背景には、なによりもまず、祖國を暗黒の勢力から解放しようとする愛國・救國精神の存在があった。當初、それは實業救國論から、初步的な社會主義思想まで、實に幅広い思想を許容していた。しかし、資本主義國の生産現場での勞働と、提唱者である中佛教育會、北京軍閥政府の出先機關である中國公使館、さらにはそれらの背後に位置するフランス帝國主義政府とのたえざる闘争は、中國民衆の眞の敵が何者であるかを、勤工儉學生ひとりひとりに事實を以て教えた。

このようにして、五四時期の青年たちは、勤工儉學という一つの實踐を通じて、帝國主義とその走狗、封建軍閥との非妥協的な闘争こそが、祖國を解放する唯一の方途であると認識するに至ったのである。勤工儉學生の共產主義化は、反帝反封建の闘いをすすめるうえで、かれらが最後にたどりついた歸着點だったのである。

したがって、その過程において、コミンテルンやフランス共産黨など外部からの援助が重要な意味をもったであろうことは當然であるにしても、基本的な要因は、やはり祖國解放の實現をめざした青年たちの自立的な、思想の深化、發展にあったと考えられる。

この意味で、一九二一年九月の所謂「リヨン進軍」は、重要な轉換點となった。平民教育の實現をスローガンに、フランス帝國主義、北京軍閥政府の陰謀とたたかったこの闘争で、勤工儉學生の多くは、帝國主義と封建軍閥の本質をあますところなく悟り、かれらの反帝反封建の意識は、不退轉の決意にまで高まった。しかも、百四名に及ぶ先進分子の強制送還という犠牲をはらったかれらは、さらなる反帝反封建の闘争の前進を保證するためには、なによりも前衛的組織が必要であると痛感するようになった。このような勤工儉學運動の深化が、多くの勤工儉學生たちに、コミンテルンの唱える共產主義革命の理論を本格的に受容させるに至ったのである。それは、運動の發展法則の必然であつた。

かかる筆者の觀點からすれば、フランスにおける本格的な共產主義組織の成立は、どんなに早くとも、「リヨン進軍」以前にさかのぼることはないという豫測が成り立つのである。

この見解に眞向から對立するのが、李璜の回想である。李璜は、フランスで結成された反共國家主義團體、「中國青年黨」の有力なメンバーであつた。その當時から現在に至るまで、かれは一貫して、中國共産黨をソビエトロシア及びコミンテルンの傀儡と非難し續けてきた。當時、『先聲週報』などで、赤裸裸に展開されたかれの反共宣傳は、最近に至り、回憶録というより陰微なかたちで繼續されている。

かれが一九六九年の『明報』に執筆した「留法勤工儉學與中國共産黨」と題する回憶録も、その一種である。まず、虚心に

かれの主張に耳を傾けてみよう。

李璜の見解では、フランス勤工儉學生の共產主義化は、一にかかって、かれらの貧困とそれにつけこんだソビエトロシアの陰謀に起因しているとする。かれはわざわざゴチックを用いてこう前置きしている。「留佛勤工儉學留學生のフランスにおけるこの劣悪きわまる情況が、共產勢力の東方への擴大を陰謀していたスターリン派のパリ駐在のスパイの眼にはいった。そこで計畫的に、パリ在住の失業失學して救済されなかった學生から着手したのである」。そのうえで、かれは一九二〇年に於ける在佛社會主義青年團の形成を三つの源流に分けて説く。

「一九二〇年一月にマルセイユに到着した」百二、三十人の湖南と四川出身の學生が、モンタルジで新民學會フランス支部を結成した。その中には、蔡和森をはじめ、李立三、李富春、李維漢、蔡暢、向警予らがいたという。

これより先、陳延年と陳喬年は、父獨秀の命をうけてフランスに渡り、社會主義思想を宣傳するために、パリで「書報流通社」を設立し、『新青年』『每週評論』などを販賣していた。やがて、「一九二〇年初め、延年は宣傳によって、一人の有力な同志——四川出身の青年、趙世炎と知りあった。かれは頭腦もあり、活動好きで、すでに共產主義思想に傾いていたので、たちまち延年と共同でSY「社會主義青年團」の組織を發起した」。

新民學會フランス支部と書報流通社というこれら二つの組織については、すでに『湖南歷史資料』一九五九年第四期や『近代史資料』一九五五年第二期でも、その存在を確認することができ、さらに一九五八年發行の何長工『勤工儉學生活回憶』もふれているところである。もっとも、一九二〇年初めに陳延年と趙世炎がSYを發起したというのは、李璜の「創見」である。しかし、李璜の「眞の獨壇場」は、いま一つの最も重要な源流であるとされる「法共中國組（フランス共產黨中國人細胞）」の敘述にあるといわなければならない。かれによれば、フランス共產黨中國人細胞の形成は、コミンテルンに共鳴していた左翼小説家、アンリ・バルビュスの光明社（La clarté）との交際からはじまるという。

クラルテでは、毎週週末に講演會や研究會を催し、「とりわけ外國からフランスへ留學してきた青年の参加を歓迎」した。

その席ではコーヒーのサービスがあり、「妙齡の乙女が、客のために砂糖をいれ、お菓子をだしてくれて、ウインクス」、青年たちをうっとりさせたと、李璜は再びゴチックで敘述している。かれもその魅力にひかれて何度か出かけた。そこに「濃眉大眼、満面笑容」の「東方の美男子」が同席していたが、後から思いかえすと、それが周恩來だった。

茶會の席では、バルビュスが來客に、問題を提出するよう促し、あるものは英語、あるものはフランス語で質問したが、バルビュスはどんな質問でも答えることができた。しかし、「どれもこれも莫然とした淺薄な問題ばかりで、とても光明クララとよべるものではなかった」。しかも、發言したのは白人の青年學生で、インドや中國の學生は、だれも口を開かなかった。

するとたちまち、「年のころなら四十前後の中國の北方人がわたしの前にあらわれ、わたしと〔周〕太玄に中國語でわかるかとたずね、もしわからなければ、通譯の勞をとってやろうといった」。やがて、この「北方の大男」は、フランス語の小冊子を二冊わたしにくれたが、一冊は『共產黨宣言』であった。

この出來事で、李璜はクラルテがコミンテルンの宣傳機關であることを察知し、以後二度とはいかなくなったが、この経験から、「周恩來がまず共產黨の外郭團體に参加し、それからさらに、この北方の大男によってコミンテルンの『法共中國組』にひきずりこまれたことについて、わたしは探るべき手がかりをつかんでいた」と、李璜は斷言している。

このコミンテルンのスパイ、「北方の大男」は、職にあぶれ食うにこまった勤工儉學生の集まる華僑協社にもあらわれ、李璜もその姿を二度目撃した。一度は周恩來もいっしょだった。「周恩來は盜人のごとくびくびくし、じつとこの北方の大男をみつめているわたしの眼にでくわすと、とたんに顔をまっ赤にしてうつむき頭をたれて、そそくさと逃げ去った。わたしはすぐに、かれら二人は華僑協社のテントで苦しみあえぐ學生を、オルグしにきたのだと悟った」。

李璜の思ったとおり、「まもなく（一九二〇年夏）、協社のテントで地面に寝ていた住人たちで、こっそりとラタン街の學生下宿にひっこしていったものが、二十七、八人もあり、かれらの生活は好轉した」。こうして、周恩來と「北方の大男」を手先ぎとするコミンテルンのループル作戦に搦めとられた學生たちは、やがてリュクサンブール公園のベンチで日がな一日讀書

にふける優雅な生活をおくるようになった。かれらは、讀めもしない佛文の『共產黨宣言』に、わけのわからない書きこみをしては、一端のマルクス主義者を氣どっていた。このグループこそが、フランス共產黨中國人細胞にはかならないと、李璜はいうのである。

そして、一九二〇年秋から冬にかけての頃に、この中國人細胞と、新民學會フランス支部、書報流通社<sup>11</sup>SYが連合して、社會主義青年團(SY)を結成した。コミンテルンの指令にしたがって勢力擴大をはかる社會主義青年團は、留佛勤工儉學生の間にわざと波風をたてては、鬭争の實地訓練に利用した。一九二一年におこった二八鬭争、リヨン進軍などは、いずれも、社會主義青年團が故意にひきおこした騒動であつた<sup>12</sup>という。

以上みたように、李璜は勤工儉學生の共產主義化を説くにあたり、フランス共產黨中國人細胞なる組織にスポットをあて、しかもその形成は、一から十まで、勤工儉學生の貧困につけこんだコミンテルンの買収工作によると強調しているのである。こう語るかれの底意が、勤工儉學運動自體の内在的發展をまったく無視し、中國共產主義の重要な一源流がコミンテルンの金銭だけを糸とする傀儡であつたことを「暴露」し、ひいては初期の中國共產主義運動總體を同じ觀點から糾弾するところにあることは、すでに明白であらう。

したがって、回憶録という形式をとっているものの、そこには當然、國家主義者の立場から自己の主張に都合のいいように、史實に歪曲が施こされている可能性が、十分にありうるのである。だとすれば、國家主義者の戲言とうちすてておけばよいのであって、なにもかれの「回憶録」を長々と紹介する必要などないようなものであるが、そうはいかない。その戲言を「眞實」として論文に引用する「研究者」が後をたたず、この方面で一定の市民権をえているからである。

現場證人としての「臨場感」にあふれ、しかも三つのグループがSYに合流したとまことしやかに説く李璜の口舌は、資料の乏しいこの問題を研究する者にとって、「第一級の資料」と思われたのも、無理からぬことかもしれない。例えば、王章陵は、その大著『中國共產主義青年團史論』で、フランスにおける社會主義青年團の形成を分析するに際し、重要な部分は、ほ

とんど全面的に李璜からの引用でうずめている<sup>(2)</sup>。また、李天民は『周恩來評傳』の第二章で、「李璜先生口述」なる注を用いている。『明報』に發表される以前に、李璜から直接口述筆記したとの意味であろう。李天民は「法共中國組」の存在には疑いをもったのか採用せず、もっぱらコミンテルンの買収工作に的をしぼって、李璜口述を利用している<sup>(3)</sup>。そして、嚴靜文の『周恩來評傳』も、李天民の著作を介して、李璜に負うているところが多い<sup>(4)</sup>。

さらにフランス勤工儉學運動の研究に先鞭をつけた寺廣映雄「フランス勤工儉學運動について」でも、第五章 フランスにおける共産主義組織の成立で、李璜の圖式をそのまま論旨にくみいれているのである<sup>(5)</sup>。

これほど内外の「信用」を博している李璜の回憶ではあるが、それが信頼するに値しないことを實證するのは、いとも容易である。かれのもつとも得意とする「法共中國組」の活動は、少くとも次の二つの理由で、到底成りたたない。

第一に、李璜によれば、一九二〇年夏頃、周恩來は、「北方の大男」と組んで、貧窮學生の買収に暗躍していたというが、最近發見された北京中佛教育會への渡佛願書の日付<sup>(6)</sup>からみて、周恩來が一九二〇年末以前にフランスに姿を現わしていたことなどありえない話である。

第二に、周知の如く、フランス共産黨は、一九二〇年十二月末ツールで開催されたフランス社會黨第十八回大會で、コミンテルン加入を主張する左派が分裂して結成されたものである。フランス共産黨自體がまだ存在していない段階で、フランス共産黨中國人細胞が活動していたというのは、いとも奇妙な話ではないか。

この辯明の餘地のない矛盾に氣づいたためであるかどうかはわからないが、後に出版した單行本『學鈍室回憶錄』では、肝心の「法共中國組」をあつまり削除してしまっている。かれの回憶を金科玉條の如く尊重した研究者は、この「裏切り」にどう對處するのであろうか。

もつとも、この削除は、李璜がその立場を放棄したことを意味するものではない。第一の事實をまだ知らなかったかれは、なおも、一九二〇年夏に周恩來がコミンテルンの手先きとして暗躍していたと固執し、その結果、秋頃にはコミンテルンの金



錢のみによる傀儡である「社會主義青年團」がデッチあげられたと主張しつづけているのである。こうまでして、社會主義青年團の成立を一九二〇年中のこととがんばるのは、二八闘争、リヨン進軍など一連の闘争を、すべてコミンテルンに買収された「不良勤工儉學生」の陰謀に結びつけたいからであらう。

いずれにしても、筆者のみるところ、李璜の回憶は、何長工の回憶などを借用している部分は別として、あとはフランス留學時代の脈絡のない斷片的記憶を、反共という枠組の中に適當に配置したものと思えない。なるほど、李璜はフランスで「北方の大男」にも、周恩來にも會ったことがあるのかもしれない。だが、それをコミンテルンのループル作戦と結びつけているのは、まったくかれの想像力の豊かさを示す以外のなものでもない。

李璜の回憶錄の信憑性について、これ以上詮索しても、ほとんど無意味であらう。問題は、かかる回想が、なにゆえ一部の研究者の支持をえて、「眞實」としてまかり通るようになったかということにある。その歴史的、文獻的背景を探ってみることにしよう。

## 二、諸説の整理・検討

李璜の自由奔放な「回憶」を許したのは、フランスにおける共產主義運動が、初期中國共產主義運動史の中でも、もっともその記録に乏しく、しかもその数少ない記録も、あまりに斷片的で不明な部分が多く、かつ齟齬が甚しいためである。フランスという遠隔地での活動であつたうえに、共產主義運動に従事したフランス留學生の多くが、歸國後ただちに、國民革命とそれにうち續く第二次國內革命戦争に忙殺され、フランスでの運動を記録にとどめておくとまがなかったという條件が、勢い、かなり時間をへだてた當事者の回想というかたちの記録しか残しえなかったのである。よるべき第一次資料を缺いた回想の集積が、從來この問題に關する記録のすべてであつたといつてもいいすぎではない。

管見の及ぶかぎりでは、當事者の回想は、十數年の歲月をへた延安時代になって、はじめて外國人ジャーナリストの筆でひきだされたようである。

一九三六年、陝西ソビエト區の首都保安をめざしたエドガー・スノーは、その前哨基地百家坪で、フランスにおける共產主義運動の指導者であった周恩來と二日間をともにし、その經歷を聞きだすことに成功した。その一端はすでに一九三八年刊行のランダムハウス版“Red Star over China”<sup>(8)</sup>で紹介されたが、フランスでの經歷については、一九六八年刊行のグローブ・プレス版に至るまでふせられたままであった。

また、スノーは保安で毛澤東のインタビューにも成功し、もつとも感動的な一章「ある共產主義者の來歴」を書きあげた。この一章は、いち早く中國語譯がなされ、一九三七年十一月、上海の黎明書局から史諾筆錄、汪衡譯『毛澤東自傳』として出版された<sup>(9)</sup>。もつとも、この上海版は、必ずしも、翌年發行されたランダムハウス版の一章を摘譯したものとはいえない。事實のくいちがいがあまりにはなはだしいからである。ともあれ、國內でフランス勤工儉學の準備に活躍した毛澤東が、第二の證言者となったのである。

一方、ニム・ウエルズは、一九三七年延安で、數少ない女性留學生の一人である蔡暢から、フランスでの生活をかなり詳しく聞きだしていた。その部分は、一九三九年ニューヨークで刊行された“Inside Red China”には收録されず、同年上海の復社から出版された寧謨・韋爾斯『續西行漫記』で増補されたのである。こうして、延安時代初期に三つの證言があらわれた。

その後、當事者の記憶が再びよびさまされるのは、一九四六年の所謂「四八烈士」の遭難事件を契機とする。「四八烈士」とは、一九四六年四月八日、重慶での和平交渉から延安への歸途、山西省興縣付近で飛行機が墜落し犠牲となった七人の中國共產黨代表團をさすのであるが、その中に、フランスでの指導的人物であった王若飛と、その叔父でやはり勤工儉學運動に参加した黃齊生の二人が含まれていたもので、四月十三日から五月二日にかけて、連日のように『解放日報』の紙面をうめた「四八

烈士」追悼文の中に、フランスでの運動を回想する文章がいくつか發表されたのである。四月十三日の「王若飛同志傳略」、同二十日の蔡暢「永恆的記憶——哀悼王若飛同志」、および同二十三日の徐特立「回憶留法勤工儉學時代的若飛同志與齊生先生」の三編が、フランスでの共產主義運動についてふれている。

さらに十二年が経過して、フランス勤工儉學についての集大成ともいべき何長工の『勤工儉學生活回憶』が出版された。この書はすでに拙譯で指摘したように、<sup>(10)</sup> たんに何長工個人の回想にとどまるのではなく、解放後に發掘された資料である卞孝萱『留法勤工儉學資料』（『近代史資料』一九五五年第二期所收）などを十分に驅使したものである。フランスでの共產主義運動に關する部分は、王若飛追悼の『解放日報』記事を參照した形跡があきらかである。

こうして集積された種々の回想は、いま紹介した概略からわかるように、何長工のものだけを除き、抗日戰爭、第三次國內革命戰爭の中で、おそらくほとんど資料を手もとにおいていない状態で、個人の記憶を唯一のたよりにひきだされたものである。しかも、解放後出版された何冊かの權威ある黨史、革命史も、フランスでの共產主義運動については、第一次資料の探索をあまり熱心にすすめた様子はなく、從來の通説を簡單に紹介するだけに終ったものが多いのである。

その中で、丁守和・殷敘彝『從五四啓蒙運動到馬克思主義的傳播』は、唯一の例外といえる。兩氏は、あの膨大な『五四時期期刊介紹』全三冊を編集した主要メンバーとして高名であるが、この研究書は、氣の遠くなるような雜誌整理の過程で收集した基礎資料をもとに、執筆されたものである。その結果、フランスでの共產主義組織についても、筆者の推測するところでは、中國社會主義青年團の機關誌『先驅』の所載記事にもとづくものであらうと思われるが、<sup>(11)</sup> 從來の一連の黨史、革命史とはまったく異なる事實を提示しているのである。

以上みたように、一九六〇年以前においてわれわれがフランスでの共產主義運動を窺う材料としえたのは、一、二の例外を除き基本的には、當事者の時間をへだてた回想と、それにもとづく概説的な黨史、革命史にかぎられていたのである。したがって、それら相互の間に、フランスにおける共產主義組織の名稱、成立時期、主要メンバーなどの點で、かなりの齟齬が生じ

たのは、むしろ當然といえるかもしれない。

別表は、當面の問題である成立時期を基準にして、これらの諸説を分類したものである。便利をはかって、李璜の回憶に追隨する系列も、一部分を表中に加えておいた。一瞥すればあきらかなように、基準を成立時期のみに設定しても、強引に分類して三分、實質は四分五裂の状況を呈しているのである。もし、組織名稱、發起者をも基準にすれば、ほとんど分類の意味をなさない表ができあがるであろう。まさしく、「言、人人に殊なる」である。以下、敢えて區分した各グループの問題點を檢討していく。

Aグループでは、波多野乾一(A―1)の所説<sup>(12)</sup>がやや孤立的であつて、スノーのインタビューにこたえた毛澤東の回想が、このグループの端緒になるように思える。しかし、すでに述べたように、A―2とA―3では、その内容を異にするのである。兩者とも、フランスにおける共產主義組織の名稱をあきらかにせず、「一個共產黨」、「a Chinese Communist Party」と表現し、その成立時期は中國共產黨の成立とほぼ時を同じくする、という點では一致しているが、中國共產黨の成立時期を、A―2は一九二〇年夏、A―3は一九二一年五月としているのであるから、一年近くの開きがあるわけである。さらにA―2は發起者にまったくふれていないのに對し、A―3では、周恩來、李立三、向警予、羅邁(李維漢)、蔡和森の名前が示されている。しかも、この部分に關しては、A―3は一九六八年のグループ・プレス版に至るまで、一切訂正はない。とすれば、常識的にいって、A―3の方がスノーのノートに忠實であり、毛澤東の發言は一九二一年成立説であつたと考えるのが適當であろう。

『解放日報』記事(A―6)から胡華の第二作(A―11)に至る所説は、基本的にこの毛澤東の説に追隨するものであるが、組織名稱、發起者の點となると、それまでの間に、なんらかの未知の資料が介在しているようである。毛澤東が明らかにできなかった組織名稱について、これらの所説ではほぼ二分するかたちで、「社會主義青年團」あるいは「中國少年共產團」という名稱が出現しているうえに、發起者の顔ぶれも漸増しているからである。

出典	組織名稱	成立時期	發起者・主要メンバー
A 一九二二年以前成立説			
一、波多野 乾一	中國少年共產黨	一九二〇年前後	趙世炎、陳延年、李立三、周恩來
二、史 諾	一個中國共產黨	與國內組織（一九二〇夏）幾乎同時	
三、Snow ①	a Chinese Communist Party	國內組織（一九二一、五）と略同時	周恩來、李立三、向警予、羅邁、蔡和森
四、李致工	中國少年共產團	一九二〇年	周恩來、趙世炎、李立三、蔡和森、任卓宣、李富春
五、李 昂	中國少年共產團	差不多與中國共產黨成立的時候同時	趙界炎、陳延年、李立三
六、解放日報 ①	社會主義青年團	一九二一年	周恩來、王若飛、蔡和森、趙世炎、陳延年
七、胡 華 ①	中國少年共產團	?	周恩來、王若飛、蔡和森、李立三、羅邁、李富春、向警予
八、洪煥椿	中國少年共產團	一九二二年二月	周恩來、王若飛、蔡和森、李立三、羅邁、李富春、向警予
九、中國青年	社會主義青年團	一九二二年二月	周恩來、王若飛、蔡和森、李立三、羅邁、李富春、向警予、聶榮臻（但し、*は更正で削除）
十、李 銳	社會主義青年團	一九二二年	周恩來、王若飛、蔡和森、李立三、李維漢、李富春、向警予、張昆弟、羅學瓚
十一、胡 華 ②	中國社會主義青年團	一九二二年二月	周恩來、王若飛、蔡和森、李立三、羅邁、李富春、向警予、聶榮臻、蔡暢、陳延年、趙世炎
B リヨン大學闘争以後成立説			
一、寧 謨・韋爾斯	中國共產黨支部	一九二三年二月	周恩來、陳延年、趙世炎
二、解放日報 ②	社會主義青年團	一九二三年冬	王若飛
三、解放日報 ③	社會主義青年團	一九二三年	

四、丁守和等

中國共產主義青年團旅歐支部

一九三二年

C 二段階說

一、Snow ②	前 China Socialist Youth Corps 後 Communist Youth League	一九三二年 一九三二年	蔡和森、蔡暢 周恩來、蔡和森、蔡暢、趙世炎、李富春、李立三、王若飛、陳延年、陳喬年 王若飛、趙世炎、陳延年
二、何長工	前、社會主義青年團 後、中國共產黨旅歐總支部	「二」快到冬天 一九三二年七月	周恩來、王若飛、趙世炎、陳延年
三、李璜	前、法共中國組等 後、社會主義青年團	一九三〇年夏 一九三〇年秋冬間	周恩來、陳延年、趙世炎、蔡和森
四、李天民	前、社會主義青年團 後、少年共產黨	一九三〇年末 一九三二年七月	周恩來、趙世炎 周恩來、王若飛、趙世炎、陳延年
五、王健民	前、共產主義中國青年聯盟 後、少年中國共產黨	一九三〇年 一九三二夏秋之間	周恩來、趙世炎

出典一覽

- A 一、波多野乾一「國共再婚の立役者周恩來傳」——『改造』一九一七（一九三七、七、一）  
二、史諾筆錄、汪衡譯『毛澤東自傳』上海 黎明書局 一九三七、一一、一  
三、Snow "Red Star over China" New York Random House 1938  
四、李致工編『中國共產黨史略』統一出版社 一九四〇、九  
五、李昂『紅色舞臺』北平 勝利出版社 一九四六、五（初版一九四一、一一）  
六、「王若飛同志傳略」——『解放日報』一九四六、四、一三  
七、胡華『中國新民主主義革命史』北京 人民出版社 一九五二、一二（初版一九五〇、三）  
八、洪煥椿『五四時期的中國革命運動』北京 三聯書店 一九五六、八  
九、「青年團歷史參考資料」——『中國青年』一九五七、四（二）、一六  
十、李銳『毛澤東同志的初期革命活動』北京 中國青年出版社 一九五

旅歐中國共產主義青年團的成立

七、七

- 十一、胡華主編『中國革命史講義』北京 人民大學出版社 一九五九、一  
B 一、寧謨·韋爾斯『續西行漫記』上海復社 一九三九  
二、蔡暢「永恆的記憶——哀悼王若飛同志」——『解放日報』一九四六、四、二〇  
三、徐特立「回憶留法勤工儉學時代的若飛同志與齊生先生」——『解放日報』一九四六、四、二三  
四、丁守和、殷毅彙「從五四啟蒙運動到馬克思主義的傳播」北京 三聯書店 一九六三、六  
C 一、Snow "Red Star over China" New York Grove Press 1968  
二、何長工「勤工儉學生活回憶」北京 工人出版社 一九五八、一一  
三、李璜「留法勤工儉學與中國共產黨」——『明報』四五、四七（一九六九、九、一）  
四、李天民「周恩來評傳」臺北 黎明文事業公司 一九七六、一  
五、王健民「中國共產黨史稿」臺北 中央圖書供應社 一九七四、九（初版一九六五）

六五七

名稱の點では、李致工（A—四）、李昂（A—五）が一派の源となり、蔡暢（B—二）、徐特立（B—三）が別派の源となっているように思われる。發起者の漸増傾向は、『中國青年』（A—九）のように從來の通説に削除をほどこしたり、李銳（A—十）と胡華（A—十一）のように相互に出入があつたりして一様でなく、系譜關係は鮮明でないが、斷片的資料の追加によつて浮びあがつた人名をやや慎重さを缺くかたちで、從來の通説に積疊していった傾向を示している。

こうして形成されたAグループは洪煥椿（A—八）、『中國青年』（A—九）、胡華（A—十一）の三者が、一九二二年二月という明確な成立時期の一致をみている點で、かなり有力な説を提供しているかのようであるが、實際は、次に列記する三つの弱點をもっている。第一に、端初となつた毛澤東の證言は、かれ自身がフランスでの運動を體驗していないうえに、當初流布した二つの著作の間に混亂があつて、ぬぐいがたい不信感を與える。第二に、發起者の最初には、ほぼ一致して周恩來の名をあげているが、もし一九二二年二月成立を最終的結論とするならば、先の考證であきらかになつたところから、周恩來はフランス到着後、閒髪をいれず共產主義組織を結成したことになる。いかに有能な周恩來といえども、準備期間もなくすぐに組織の中心にすわつたなどというのは、まず考えられないことである。第三に、成立時期の一致にしてもA—十一の如く、A—七と同一の著者でありながら、なんのことわりもなく組織名稱を變更して一九二二年二月説を採用している例に典型的なように、いずれも典據を示さない主張である點や、發起者でみられた積疊現象などから考えると、先行の説への付和雷同の結果ともみなせる。Aグループが最も多數であることは、必ずしも眞實の保證にはならない。吠形吠聲ということもありうる。

一方、Bグループは筆者の豫測に適合する成立時期を主張しているものではあるが、問題點も少くない。主たる證言者である蔡暢は、約十年の時間をへだてて、二度の回憶をのこしている。ニム・ウェールズに語つた最初の證言（B—一）では、「一九二二年十二月、周恩來、陳延年、趙世炎などフランスの人たちで中國共產黨支部を設立した」と述べながら、王若飛の追悼文（B—二）では、「きみ『王若飛』は、一九二二年冬に成立したS・Y（社會主義青年團）のために、確固とした大衆的基礎をうちたてた」と記しているのである。後者が追悼文であるということ考慮にいれるならば、前者であげた發起人をす

べて省略し、王若飛の名前だけをだしていることは納得できるにしても、組織名稱に重大な変更があることは、その記憶の正確さを疑わせるに足るものである。

實際のところ、蔡暢は、B―二で、「二八闘争」を二月八日(正しくは二月二十八日)としたり、「二八闘争」、「リヨン進軍」を、どちらの證言でも、一九二二年(正しくは一九二一年)の事件としているなど、デートに關する記憶ちがいが多に甚しい。

したがって、いかに身を以て經驗した人物の證言とはいえ、信賴をおくことにはかなり躊躇せざるをえない。組織名稱と成立時期をわずか一行で述べているにすぎない徐特立の回想(B―三)は、蔡暢の補強にはなるのであるが、あまりに簡單で分析の材料になりえないうらみがのこる<sup>(15)</sup>。また、丁守和、殷敘彝の著作(B―四)は、すでに指摘したように、唯一例外的な研究書であるので、ここで俎上に載せるのは適當であるまい。要するに、Bグループは、蔡暢の與えた不信任感が決定的なマイナスといえる。

最後に、Cグループは、李璣以下(C―三、四、五)については、第一章で検討したので、周恩來(C―一)、何長工(C―二)の回想が、ここでの検討の對象となる。

フランスにおける共產主義運動の指導者であつたという點で、周恩來の證言には多大の期待をかけることができる。しかし、そこに蔡暢と同様の記憶ちがいをさがしだすことも容易である。まず、關係部分を引用してみよう。

一九二〇年十月私はフランスへむけて出帆しました。船のなかで、毛澤東によつて組織された新民學會に所屬する湖南の學生多數に會いました。その中に蔡和森と彼の妹蔡暢がいましたが、彼らが一九二一年にフランスで最初の中國社會主義青年團(the first China Socialist Youth Corps in France)を組織したのです。一九二二年に私は中國共產主義青年同盟(Chinese Communist Youth League)の創設者の一人となり、ここでフル・タイムの仕事をするようになりました。：



…在佛の共產主義青年同盟の創立メンバーの中で、このようにして黨員になったのは蔡和森、蔡暢、趙世炎、李富春、李立三、王若飛、陳獨秀の二人の息子、陳延年と陳喬年などでした。<sup>(17)</sup>

第一の記憶ちがいは、蔡兄妹との出会いである。『時報』記事と、『新民學會會員通訊集』第三集所收の毛澤東宛の蔡和森書簡によって、かれらが、一九一九年十二月二十五日に上海をたち、翌年二月二日パリに到着したことは、すでに明らかとなっている。<sup>(18)</sup> 周恩來がかれらと同船であったことはありえない。第二に、一九二二年に結成された中國共產主義青年同盟の創立メンバーに、蔡和森、李立三をあげているが、かれら二人は、リヨン大學闘争で強制送還された百四名の中にはいなかったから、メンバーに加わっていたはずがない。

この二點は、いずれも致命的な記憶ちがいとはいえないまでも、述べられている他の事柄にも疑いをいだかせるに十分である。周恩來といえども、時の経過をいかんともしがたく、こと細かな點まで正確な記憶を期待することはできない。

他方、何長工の回想については、前出の體驗者の記述にみられたような、明らかな矛盾、記憶ちがいをみとめない。リヨン大學闘争の後、「まもなく冬だというころ、高風と毛羽順とが手紙を突然くれて、王若飛、趙世炎、陳延年などの同志が、パリで社會主義青年團(S.Y.)をつくる準備をしているが、わたしに参加するかどうか、とってきた」という條は、リヨン大學闘争で蔡和森をはじめ多くの先進分子を失なった工學互助社が、その敗北の總括のうえに書報流通社の陳延年などを糾合して、反帝反封建の前衛組織をつくろうとしていた経緯を、よく示している。そのうえで、「在佛中國社會主義青年團が成立してから、中國共產黨中央との關係が樹立された。一九二二年七月、黨中央の指示によって、S.Y.は中國共產黨ヨーロッパ總支部に改組された<sup>(19)</sup>」とする見解は、組織發展の法則にも適合しているように思われる。

それ故に、何長工の回想は、從來、多くの回憶の中でもっとも信用を博してきたのであるが、『勤工儉學生活回憶』全體を通じてみると、拙注で指摘したようにいくつかの記憶ちがいが發見されるのであり、個人の記憶にもとづくというかぎりでは、

やはり他の回想と同じ資格しかもちえないのであつて、諸説紛々たるフランスでの共産主義運動に、決然たる斷定を下すだけの權威はもっていないといわなければならぬ。

このように、從來の諸説を主に成立時期を中心として、整理してみると、リヨン大學闘争を境に、前後ほぼ同数の意見が出そろつた。筆者と同じく、リヨン大學闘争以後を主張するのは、多く實際にフランスでの運動を経験した人々の回想であるが、總じていえば、メモをもたない回憶に特有の記憶ちがいが、まゝ發見され、その主張の信憑性をいちじるしくよわめている。これに對して、毛澤東の證言に端を發する一九二一年以前成立説は、解放以後の正統的な黨史、革命史が多く支持しており、いずれも記述がきわめて簡略であるだけに、その記述自體の中に矛盾をはらんでいるものは、比較的少ない。しかしながら、その多數意見が形成されてきたあとをふりかえてみると、常識的な歴史研究の手續きすらふんでいないのではないかと思われる節が、しばしば見うけられるのである。

以上のような、それぞれ短所をもつ諸説の並立は、一方で、フランスにおける共産主義組織の形成が單線的ではなく、かなり複雑な経過をたどつたことを反映しているとともに、他方では、第一次資料の缺如が、その経過の把握を必要以上に混亂させ、齟齬、對立を派生していった結果ともいえる。そこにおいては、李璜の「回想」も、一定の市民権、少なくとも問題をより混亂させる權利を要求しえたわけである。

### 三、伍豪執筆文書

伍豪<sup>ウーハオ</sup>とは、周恩來の異名である。五四運動の後、天津における愛國運動の中核組織として結成された覺悟社で、周恩來は伍豪（五號）と名のつていた。

一九二〇年十一月月上旬、フランス郵船ポルトス號に搭じた周恩來は、一ヶ月餘りでパリに到着した。その頃、フランス勤工

儉學生の生活情況は悪化の一途をたどり、中佛教育會との矛盾を深めていた。パリ南方百キロ餘りのところにあるモンタルジでは、湖南、四川出身の勤工儉學生が、蔡和森、王若飛等を中心に、工學互助社（工學互助組、工讀互助團などと稱されることもある）を組織していた。

「勉學權、勞働權、生存權」のスロガンをかかげてたたかれた二八闘争、北京軍閥政府とフランス帝國主義政府との中佛祕密大借款に反對する闘争、そして平民教育の實現をめざして反動派の陰謀にいどんだリヨン中佛大學闘争、いずれの闘争においても、工學互助社はつねに勤工儉學生の先頭にたつてたかつた。しかし、「社會主義の研究」と「社會革命の實行」を標榜してはいたものの、實質的には共產主義者、社會民主主義者、無政府主義者の寄り合い所帯であつた工學互助社は、一連の闘争で内部矛盾を深め、リヨン中佛大學闘争の敗北で大量の先進分子を失つた結果、三派に分裂してしまつた。<sup>(20)</sup>

周恩來は、ともに渡佛していた覺悟社のメンバーとリヨン中佛大學闘争の敗北を總括し、より強固で純粹な前衛組織の必要性を痛感した。王若飛、趙世炎等、強制送還をまぬがれた工學互助社の共產主義派や華工の先進分子なども、同じ結論に達し、やがてこれらの團體が結集して共產主義組織が樹立された。この組織は、國內の共產黨中央、社會主義青年團中央と聯絡をとることにつとめ、一九二三年初めに至つて漸く團中央との聯絡に成功した。

同年三月、周恩來は「書記伍豪」の筆跡もあざやかに、團中央へあてて「報告第一號」を認めた。その中で、フランスにおける共產主義組織形成の経緯が、詳細に報告されたのである。

この報告文書は、五十年近くも埋もれたままであつたが、周恩來總理逝去の後、その記念のために熱心にすすめられた遺品發掘活動によつて、再び日の目をみることになった。一周忌にあたる一九七七年一月以來、北京の歴史博物館で催された「周恩來同志紀念展覽」に、その寫眞が展示され、注目をあびた。香港の左派系月刊誌『七十年代』は、一九七七年七月號でいち早く、この展覽を海外に紹介し、展示品のグラフィア寫眞を掲載した。<sup>(21)</sup>それによつて、この報告文書の第一葉を、非常に不鮮明にはあるが、うかがうすが提供された。「旅歐中國共產主義青年團」（中國社會主義青年團旅歐之部）報告第一號」と

題するこの横書文書は、「中國社會主義青年團」中央執行委員會同志宛にて、一九二三年三月十三日の日付で、パリから送られたものであることが判明した。

その後、中國でも、胡華をはじめ多くの論者が、この報告文書をもとにして、フランスにおける周恩來の革命活動を仔細に紹介するようになり、さらに、中國歴史博物館の編にかかる『紀念周恩來總理文物選編』が、報告第一葉のいま少し鮮明な寫眞を掲載した。こうして、伍豪執筆の「報告第一號」は、次第にその内容まで、明らかにりはじめたのである。

そこに認められた記述こそ、胡華が「周恩來同志が歐州でわが黨の黨建設、團建設の活動に従事した歴史的確據<sup>(2)</sup>」と斷定している如く、フランスでの共產主義運動に關する第一次資料にほかならない。第一葉の寫眞と、胡華以下の論者が一致して認めている事實から判斷して、それは從來の諸說紛紛たる狀況にとどめをさす、決定的資料といっても、過言ではない。この資料は、明白にリヨン中佛大學闘争以後に、共產主義組織が結成されたとする説を支持するものである。

この結成の過程を、胡華は、周恩來に焦點をあわせ、『覺郵』掲載の文章をも利用して、以下のように説明する。

かれ〔周恩來〕は、覺悟社社員にあてた手紙の中でも、自からの信念をかためた過程を述べ、來佛以後、共產主義に對する「探究の興味」がさらに深まったといっている。その後、ともに來佛していた覺悟社社員と「何回もの討論をへて、一九二一年十月以後になってやっと正式に決定した」……

一九二一年末、周恩來同志は、趙世炎、陳延年などの同志といっしょに、中國少年共產黨を發起、組織した。一九二二年六月、旅歐中國少年共產黨は、パリで成立大會を召集し、同時に積極的に國內と聯繫を樹立しようとした。<sup>(3)</sup>

前半の「伍的誓詞」(『覺郵』第二期所收)を引用した部分の「一九二二年十月」という年月は、正しくリヨン大學闘争で百四人の勤工儉學生が強制送還された時點を示すものである。この敗北を契機として共產主義組織の必要性を痛感したのは、周

恩來ひとりにとどまらなかった。その結果として、工學互助社の趙世炎、書報流通社の陳延年などと共同で、周恩來は一九二一年末に「中國少年共產黨」と名のる共產主義組織を結成したのである。もともと、この組織は、明確に何月何日を以て結成されたという性質のものではなかった。敢えてその成立の時點を求めるとすれば、最初の正式な大會をもよおした一九二二年六月に求めなければならない。

その後、一九二三年一月に至って、モスクワ滞在中のコミンテルン中國代表團と聯絡をとることに成功した中國少年共產黨は、その指示に従って、同年二月名稱を「旅歐中國共產主義青年團（中國社會主義青年團旅歐之部）」と改めたのである（もともと、この部分については、後に詳述するように、論者によって意見を異にする）。

伍豪執筆文書の發掘によって明らかになったこの事實に、疑いをはさむことはもちろん可能である。「旅歐中國共產主義青年團報告第一號」そのものの信憑性からして、問題にしようとするば問題にできるであろう。さらに、その第二葉以降は、いまのところ中國以外では寫眞すら見られないのであるから、中國の學者が果して正確にその内容を紹介しているかどうか、保證のかぎりではない。だが、以上の部分に關するかぎり、それは正確な史實であり、「報告第一號」にも忠實であると、筆者は考える。

その根據は獻縣の宣教師であつたレオン・ヴィゲールが、一九二〇年から三〇年にかけて中國の新聞、雜誌記事をフランス語譯して編んだ資料集成、“*Chine Moderne*” Tome I~Xの中に、發見された有力な傍證資料である。一九二四年九月二十七日、ベルリンで中國共產主義者によってまかれたビラが、その資料集に收められているが、それは鮮明にも「そのグループ〔旅歐中國共產主義青年團〕は、一九二二年六月三日に結成された。それは最初、中國少年共產黨と呼ばれたが、ついで、それに先立って結成されていた中國社會主義青年團と對をなす現在の名稱を採用した」と述べているのである。

若干の出入はあるが、フランス人宣教師の收集したビラと、伍豪執筆文書による記述が一致したわけである。しかも、中國少年共產黨の成立大會が、より詳細にいえば、一九二二年六月三日に開催されたこと、旅歐中國共產主義青年團が特に中國社

會主義青年團旅歐之部という名稱を併記したのは、國內の社會主義青年團との關係を明確にするためであることが、了解されたのである。

かくして、旅歐中國共產主義青年團の成立に至る過程は、まったく入手経路の異なる二つの資料の符合を以て、ほぼまちがひなく斷定できた。解答が明らかになったこの時點で、從來の諸説を回顧してみると、その混亂の理由も、容易に鳥瞰できるのである。

第一に、組織名稱が、（旅歐）中國少年共產黨から旅歐中國共產主義青年團と中國社會主義青年團旅歐之部の併記へと變更されたことが、組織名稱の混亂をもたらしたものと思われる。第二に、成立時期がいまいで、一九二一年末、一九二二年六月、そして一九二三年二月、いずれもが正解といえど正解といえたわけである。BグループとCグループで、留佛體驗者、すなわち蔡暢、徐特立、周恩來、何長工等の回憶が、組織名稱、成立時期いずれの點でも、多くばらつきをみせたのは、その結果にほかならない。かれらは、發起者などの點で記憶ちがいをおかしていたものの、少なくともフランスでの共產主義組織については、事實の一面をそれぞれ語っていたのである。

他方、Aグループの一九二一年成立説は、おそらく右の二つの理由とは無縁の誤まりをおかしたといえるであろう。Aグループの諸説が、ただ一つの例外を除いて、一九二一年に結成された蔡和森らの工學互助社の存在にふれていないという事實は、これらの説が工學互助社をフランスにおける最初の共產主義組織とみなしたことを示唆している。周恩來（C—1）が、蔡和森、蔡暢を「フランスで最初の中國社會主義青年團」の組織者と認めたのも、同じ理由からであろう。共產主義者、社會民主主義者、無政府主義者の混在していた工學互助社は、たしかにフランスで結成された最初の、社會主義的團體であつた。國內の社會主義青年團も、最初は無政府主義者など異分子の存在を許していた社會主義的サークルにすぎず、一旦解散したのち黨の指導のもとに再結成してはじめて、純粹な共產主義組織に生まれかわったという事情を考慮にいれるならば、工學互助社を社會主義青年團の一種とみなすことも、あながちまちがいとはいえないかもしれない。しかし、工學互助社を固有名詞として

の社會主義青年團でおきかえてしまうことは、一九二三年の中國社會主義青年團旅歐支部との關係上、やはり事實の把握をやまらせることになる。<sup>(26)</sup>

以上の諸説とは對照的に、丁守和、殷敘彝の勞作（B—四）、および李天民（C—四）の李璜回憶によらない後半部分が、ほぼ正確な事實の一部分を明らかにしていたことは、筆者未見の第三、第四の傍證資料が、ほかにも現存していることを暗示しているようである。<sup>(27)</sup>

ともあれ、成立時期の問題に關するかぎり、コミンテルンの金錢のみによる傀儡説を固執しつづけた李璜は權威を失墜した。むしろ、李璜の立場からすれば、この事實をふまえたうえで、その傀儡説を再編成する餘地はのこされている。だが、リヨン大學闘争の敗北が、勤工儉學生の共產主義化に重要な意味をもつことが、時期的にもはつきりしたいまとなつては、かれの「回想」の改訂は、かなり難航をきわめるであらう。

#### 四、残された若干の問題

伍豪執筆文書の出現は、フランスでの共產主義組織に關する從來の諸説對立の主要な問題にほぼ結着をつけた。だが、それは同時に、新たな疑問をひきおこすものでもある。旅歐中國共產主義青年團へ改名した時期と、中國共產黨旅歐支部の成立時期とが、新しい紛糾をひきおこす火種となる。

われわれが入手しえた「報告第一號」第一葉の寫眞は、一部不鮮明で解讀しづらいところがあるが、ほぼ以下の如くに讀める。

“旅歐中國共產主義青年團”

(中國社會主義青年團旅歐之部)

報告第一號

一九二三、三、一三、於巴黎

“中國社會主義青年團”

中央執行委員會諸同志

われわれ旅歐共產主義少年團體は、去年十一月二十日にかつて“旅歐中國少年共產黨”の名義で、同志たちに一通の公式書簡を送り、われわれが國內の青年團體に附屬してその旅歐之部とされることを願っていると切に聲明するとともに、同時に團中に三事を建議した。この書簡は、同志李維漢（羅邁）がたずさえて歸國した。とともに、旅歐少共の代表として、團中と正式に折衝するようかれに委任した。時からかかるに、すでに到着しているはずである。

羅邁の去ったのち、われわれがここでもかなり長い間じつと待っている間に、突然、“共產國際”〔コミンテルン〕と“少年共產國際”〔國際共產青年同盟〕に赴いた中國の代表が、すでに赤都<sup>モスクワ</sup>に着いたというニュースをえた。そこで當然、われわれはただちに書簡を送り、われわれの心からの敬意を表わすとともに、同時にわれわれのこの間の國內の青年團に團體加入する一件も、すでに正式に國內に提案し、いささかもためらいがないことを、切に聲明した。その後、代表團では重輔〔陳獨秀の異名か？〕同志がわれわれに返信し、われわれの“旅歐少年共產黨”を“中國共產主義青年團旅歐之部”と改稱し、この名稱組織のもとで、さきに“中央執行委員會”と稱していたのを“執行委員會”に改めるべきだと希望してきた。と同時に、われわれの團中の綱領に對する誤解とヨーロッパでの行動の方略を指示してきた。われわれは、今年一月にこの書簡を受けとった後、われわれの團體の名稱組織を急いで〔改める必要が〕があると、ますます感じるようになった。<sup>(28)</sup>



このように讀んで誤まりがないとすれば、陳獨秀(?)の指示で少年共產黨を共產主義青年團と正式に改稱するのは、少なくとも一九二三年一月以降のこととしなければならない。

ところが、この改稱時期をめぐって、中國の紹介者の説明は、二派に分れるのである。胡華をはじめとする多數派は、これを一九二二年のことと主張する。胡華は、最初の著作『青少年時期的周恩來同志』では、「同年〔一九二二年〕、中共中央は、旅歐中國少年共產黨に通知して、『中國共產主義青年團旅歐支部』と改名させた<sup>(29)</sup>」と説明し、さらに「周恩來總理旅歐時期的革命活動」では、「同年冬」といまいし時期を限定している<sup>(30)</sup>。また、再び回憶錄の筆をとった何長工は、「中國少年共產黨」の割注で、「同年〔一九二二年〕十月、全體の總投票をへて『旅歐中國共產主義青年團』と改名し、まもなく國內の團中央の指示に従って、正式に『中國社會主義青年團旅歐總支部』と名を定めた<sup>(31)</sup>」と述べている。林大昭は、この何長工の回憶を基本的に下敷きにして論文を書いているのだが、この部分に關しては、「同年〔一九二二年〕八月、中共中央は旅歐中國少年共產黨に通知し、中國共青團旅歐支部と改名させた<sup>(32)</sup>」と異説をたてている。さらに、廖永武の説は、「旅歐中國少年共產黨は、一九二二年十月に旅歐中國共產主義青年團と改名した<sup>(33)</sup>」と述べながらも、正式の改稱は一九二三年二月の臨時代表大會においてであつたとする二段階説である。

以上の諸説は、廖永武の二段階説を除けば一九二二年中ということでは一致しているが、八月、十月、冬という時期の點でのばらつきがあるばかりでなく、胡華と林大昭が、中共中央の通知を改稱の動機としているのに對して、何長工は、まず自主的な改稱があつたとし、廖永武は前段階ではその點にまったく觸れていないという相違もある。

これに對して、「報告第一號」を所藏している中國歷史博物館の編著は、一九二三年の改稱を主張している。「一九二三年二月、國內の團中央の指示にもとづいて、少年共產黨は臨時代表大會を召集し、少年共產黨を統一して旅歐中國共產主義青年團とすることを決定するとともに、旅歐總支部を成立させ、周恩來同志を書記に選出した<sup>(34)</sup>」と説明しているのである。この説明は、コミンテルンの中國代表、とりわけ陳獨秀が團中央をも代表しているとみなせば、われわれの讀んだ第一葉の内容に整

合法的に接續するものである。したがって、正式の改稱は、一九二三年二月十七〜二十日に開催されたといわれている少年共產黨<sup>(35)</sup>の臨時代表大會で決定されたと考えるのが、もっとも合理的であろう。

しかしながら、一九二二年を主張する説がすべて誤まりであるとは、速断できない。中共中央の通知にしたがって改稱したとする胡華と林代昭の説は、一九二三年一月に至って漸くコミンテルンの中國代表團と通信連絡がとれたと述べている第一葉の内容と、まったく矛盾するがゆえに、排除せざるをえないが、一九二二年十月に自主的に改稱を決定したとする何長工、及びそれに近い廖永武の説は、第一葉の内容と頭から對立する性質のものではないといえる。國內の社會主義青年團へ、羅邁を少年共產黨の代表として派遣するに先立ち、少共內部で、少共側の意志統一をはかったことは、十分に考えられることである。その際、國內の團に準據して名稱を改めることが討議されたとしても、決して不自然ではない。

さらに、ヴィゲールの収集したいま一つの資料、一九二二年十月二十七日付『天津益世報』の「巴黎中國共產黨之活動情形」と題する記事には、改稱が比較的早くから、フランスの中國人共產主義者の間では問題になっていたのではないかと思わせる節がみえる。この記事は、すでに指摘したことがあるように、どちらかといえば反共的立場にたつ人物が執筆したものであるが、「工讀社、覺悟社、無產階級共產黨、華工會といった、フランスでの以前の各種黨派は、現在すでに合して一となり、『留歐中國共產黨青年團』と名づけている<sup>(36)</sup>」という一節は、比較的正確であろうと思われる。この記事が、いつの時点の狀況を語っているかは、いまのところ判断の材料がない。船便で送られたとすれば、二ヶ月前後の時間の経過は當然あったであろう。しかし、當時においても、パリ通信が電報で送られている事例がないわけではない。したがって、時期的には、一九二二年八月から十月までの幅をもたせなければならぬが、いずれにしても、一九二二年十月二十七日以前に、すでに『留歐中國共產黨青年團』(Groupe des Jeunes du Parti Communiste chinois qui étudient en Europe)という名稱が、パリ在住の中國人の間で知られていたという事實は、注目しておいてよい。

この傍證資料から判断すれば、改稱は二段階のプロセスをへたとみなす方が、むしろ妥當ではないかと考えられる。十一月

二十日付の公式書簡が認められる以前に、國內の社會主義青年團に加入を申請するに當って、少年共產黨を共產主義青年團に改めることが決議されたが、まだ團中央の批准を得ていない段階であるので、團中央宛の書簡は、舊來の名稱のままで署名したのであろう。また、そう考える方が、「報告第一號」の冒頭にわざわざ「旅歐中國少年共產黨」の名義で」とことわっていることの意味がよくわかる。その後、一九三三年一月に至って、コミンテルンの中國代表團も、そのように改稱することを希望してきたので、二月の段階で正式に改稱を決定し、國內の團中央に對しても、「旅歐中國共產主義青年團」と名乗ることになったのではないだろうか。

ともあれ、「報告第一號」とそれについての紹介文、及びヴィゲールの傍證資料を、もつとも矛盾の少ないかたちで解釋するためには、以上のように、内部的と對外的の二段階にわたる改稱手續きを想定し、前者を一九三二年十月、後者を一九三三年二月のことと考えるほかはない。いまのところ、これを一つの假説として提示しておくにとどめる。

この少年共產黨の改稱問題とならんで、いまひとつの残された厄介な問題は、中國共產黨旅歐支部の成立をめぐる問題である。ここでも、「報告第一號」の紹介者たちは、二派に分かれる。もつとも兩派はともに、中國共產黨旅歐支部の成立を、旅歐中國共產主義青年團の成立とはほぼ同時であるとみなす點では一致しているのであるが、後者の成立時期をめぐる對立があった以上、それがそのまま前者の成立時期についての對立點となるわけである。

一九三三年説を主張した中國歴史博物館の編著は、「ほぼ、これ〔一九三三年二月〕と時を同じくして、周恩來、趙世炎等の同志は、さらにフランス、ドイツ、ベルギーなどの國に居住していた中共黨員を組織して、中國共產黨旅歐總支部を成立させた<sup>(38)</sup>」と説明している。

これに對して、胡華と林大昭は、中共中央の少年共產黨への通知の内容にふくまれる文脈で、ほぼ同一のことを述べながら、「すでに共產黨に加入している黨員に中國共產黨旅歐支部を組織させた」(胡華、單行本)、「すでに共產黨小組に加入している黨員に中國共產黨旅歐支部を組織させた」(胡華、論文)、「すでに中國共產黨に加入している黨員に中國共產黨旅歐支部を

組織させた」(林大昭)と、微妙な相違をのこしている。より大きな相違は、文脈の上からいって、胡華が一九二二年ないしは同年冬を主張するのに對し、林代昭は一九二二年八月を主張するところにある。

一方、何長工は、『勤工儉學生活回憶』では、「一九二二年七月、黨中央の指示によって、S.Y.は中國共產黨ヨーロッパ總支部に改組された」という説をとっていたが、新しい回憶では、「同年〔一九二二年〕八月、中央の決定をへて、われわれはさらに「中國共產黨旅歐總支部」を成立させた」と、時期を一ヶ月ずらせたばかりでなく、改組を別組織の成立へと改めているのである。林大昭の説は、基本的には何長工の後説にもとづくものである。

さらに廖永武は、少年共產黨の改稱に關して、われわれの假説に下敷を與えてくれたのではあるが、中國共產黨旅歐支部の成立に關しては、一九二三年二月の少共臨時代表大會の敘述をした直後に、中國歷史博物館の編著と、一字一句に至るまで同じ文章をつらねているだけである。<sup>(40)</sup>

成立時期の點からだけいえば、以上の諸説は當然、旅歐中國共產主義青年團の成立と同じく、一九二二年八月、十月、冬、および一九二三年二月の四説にわかれる。しかし、ここでは、分裂はより深刻である。組織の主體が、「共產黨に加入している黨員」「共產黨小組に加入している黨員」「中國共產黨に加入している黨員」さらには「中共黨員」、あいまいに「われわれ」とだけ記すものと、各種各様に説明されている。これらの相違は、たんに同一の事實をめぐってその表現方法がことなるといった外面的な問題にとどまらず、中國共產黨旅歐支部そのものの性格にかかわる重大な問題をはらんでいる。

もし、「中國共產黨に加入している黨員」あるいは「中共黨員」が正しいとすれば、それは當然、中國共產黨の批准をうけたうえで設立したヨーロッパ駐在の支部であるということになるであろう。ところが、もし「共產黨あるいは共產黨小組に加入している黨員」ということになれば、それは論理的にいえば、中國共產黨とは獨立に、コミンテルンに直結するかたちで、ヨーロッパに在住する中國人がつくった共產黨と解釋することも可能となろう。紹介者たちは、この點についてはまったくふれていないから、いまにわかに決論をくだすことは避けたいが、旅歐中國少年共產黨と國內の團中央との連絡が一九二三年に

至るまでとれなかった事實からすれば、一九二二年のうちに國內の黨中央の指示を受けて、そのヨーロッパ駐在の支部として成立したとは、ほとんど考えられない。この點における十分な説明が、いずれの紹介者からも聞けないことは、いずれの説を支持するにしても、かなりのためらいをのこすものである。

それ以上に、懷疑をいだかせるのは、「報告第一號」にみえる同じ語句に、紹介者たちが異なる説明を加えていることである。胡華と廖永武はともに、「周恩來同志は非常に興奮して述べた」というト書を加えたうえで、「われわれはすでに共產主義の統一した旗のもとに立っている」ということばを紹介しているが、それに先立つ説明が異なるのである。

胡華の方は、「旅歐總支部が成立するとともに、國內の黨中央、團中央と聯繫を樹立したとき」のことばと説明している。ここでいう「旅歐總支部」は、あとに續く文中に「黨中央」という語があることと前の文脈への續き方から考えて、明らかに中國共產主義青年團と中國共產黨との兩方の「旅歐總支部」という意味で使われている。<sup>(4)</sup>一方、廖永武は、「旅歐總支部が成立するとともに、國內の團中央と聯繫がとれた時にあたり」と説明した後、さらに「團中央にあてて書いた報告の中で」と加えている。<sup>(4b)</sup>ここでは、中國共產主義青年團旅歐總支部だけの意味をあらわしているのである。

このような説明の相違は、この語句の前後の文脈の把握の仕方がことなっているというよりは、胡華の方に擴大解釋がなされているとみなす方が、理解しやすい。そもそも、伍豪執筆文書が、「旅歐中國共產主義青年團（中國社會主義青年團旅歐支部）報告第一號」であつたことをいま一度ふまえるならば、その文書の中に、上級機關たるべき黨組織の問題が述べられていること自體、常識的には考えられないことではないだろうか。

さらに想像をたくましくするならば、紹介者たちの齟齬は、伍豪執筆文書の内容とは本來まったく無關係で、周恩來の中國共產黨入黨の問題をいかに處理するか、の方法から生じたのではないだろうか。中國共產黨旅歐支部の一九二二年成立説をとる胡華、何長工、林大昭らが、周恩來の入黨問題を、旅歐支部の成立を以て解決しているのに對して、一九二三年成立を主張する中國歴史博物館と廖永武はともに、一九二二年初（あるいは二月）、ドイツにおいて周恩來は中國共產黨に入黨したと指

摘しているのである。この對比からは、周恩來の一九二二年入黨という從來の通説と抵觸すまいとする意識が、兩派に兩様の處理方法をとらせたという印象が、ぬぐいがたく感じられる。

以上の理由から、伍豪執筆文書の紹介者たちは判でおしたように、旅歐中國共產主義青年團及び中國共產黨旅歐支部の成立をセットで紹介しているが、本來、伍豪執筆文書には、第二葉以下にも、中國共產黨旅歐支部についての記述はないのであつて、その部分は胡華の説明にみられた如く、伍豪執筆文書の擴大あるいは敷衍解釋の結果ではないかと、筆者は推測する。紹介者たちが、おそらく敢えて、中國共產黨旅歐支部の成立をも、あわせて説明した底には、黨と團の支部は同時に成立するものであるという固定觀念がはたらいているように思われる。

しかし、筆者の考えでは、黨と團の支部が同時に成立することが、ヨーロッパでの中國人共產主義運動にとつて、必須の要件であつたとは思えない。黨と團の關係については、一九二二年五月の中國社會主義青年團第一次全國代表大會では、特に言及されることはなかったが、一九二三年八月の第二次全國代表大會では、その問題を解決する決議がなされた。その決議文といわれる文書の中に、「黨と團の具體的關係」が五項目にわたつて述べられている。その第四項には、「團がなくて黨がある處では、黨は黨員（及び團員）を指定して、團の組織を建立させなければならない。同様に黨がなくて團がある處では、團も黨を建立する責任を負わなければならない」と規定しているのである。<sup>43</sup>とすれば、旅歐中國共產主義青年團だけがいち早く成立していたとしても、別に不都合ではない。ヨーロッパにおける黨と團の成立は、この際別個に考えた方が、混亂を緩和できるのではないだろうか。

筆者の推測では、中國共產黨旅歐支部の成立は、旅歐中國共產主義青年團と同時にではなく、若干それに遅れたのではないかと思われる。その論據は、つぎの二つの事實である。

第一に、フランスでは、國民黨リヨン通訊處の王京歧が、一九二三年初頭以降、國共合作を實現するために、共產主義者の交渉を精力的にすすめたのであるが、その際國民黨側の資料にあらわれた交渉相手は、すべて旅歐共產主義青年團であつた。

一九二三年四月二十五日付、王京岐の國民黨本部、孫鏡、鄭達佛宛の書簡では、「旅歐共產主義青年團、ともに八十餘名、…：かれら大部分の意見は、本黨に加盟あるいは本黨と携手合作することを欲せり」と報告し、さらに六月十七日付、孫、鄭兩名宛の書簡でも、前日の共青團（周恩來、尹寬、林蔚）との會談について「昨日の開會、結果はきわめて良好。旅歐少年團八十餘名、極端に本黨の宗旨に賛成し、一概に本黨に加盟せんとす」と報告している。これに對して、七月二十九日付、國民黨總務部長彭素民より王京岐への書簡は、「旅歐共產主義青年團、その本黨に加盟するを決すべきやいなやを承詢せり」と前置きして、慎重な態度で合作に臨むよう指示した<sup>(4)</sup>。したがって、少なくとも一九二三年六月十六日までの段階では、フランスにおける國共合作の共產主義者側の主體は、旅歐共產主義青年團であつたと判斷できる。

第二に、フランスにおける共產主義派の機關誌『赤光』に、中國共產黨旅歐支部の名稱が現われるのが、かなり遅いことである。『赤光』には、たびたび共產主義者の宣言が掲載されているが、第一期（一九二四年二月一日）の「爲救濟德國無產階級事告旅歐華人」、第十九期（一九二四年十一月七日）の「爲俄國革命七週年紀念告旅歐華人」、及び第二十一・二期合刊（一九二五年一月一日）の「爲徐樹錚來法告旅歐華人」は、いずれも旅歐中國共產主義青年團の單獨署名で發せられている。中國共產黨旅歐支部との共同署名があらわれるのは、第二十八期（一九二五年四月一日）の「爲孫中山先生逝世告旅歐華人」が最初である。そのほかの當時の文獻についてみても、管見のおよぶかぎりでは、中國共產黨旅歐支部の名稱は、一九二五年の五三〇運動以後にならなければ、見あたらない。五三〇運動支援の闘争は、フランスでは、比較的早く六月三日からとりくまれた。その狀況を傳えた任卓宣「旅法華人反帝國主義運動與留法青年黨的告密」に、「六月三日四日、中國共產黨旅歐支部、中國共產主義青年團旅歐區および中國國民黨駐法總支部の三團體は、聯名で華人に通告した<sup>(5)</sup>」と述べられているのが、もっとも早い例である。

以上二つの事實は、筆者の目にしえた文獻がかなりかぎられたものにすぎないうえに、きわめて不完全な狀況證據の意味しかもたないだけに、中國共產黨旅歐支部が一九二五年段階まで成立していなかったとする根據としては、薄弱なものといわな

ければならない。しかしながら、旅歐共青團と同時に成立したとする諸説が、すでに證明したように、十分な第一次資料にもとづいているとはいいがたい現在の状況では、この程度の状況證據でも、同時成立説に疑義をさしはさむ證據とはなるであろう。

このことをふまえたうえで、筆者の強引な憶測の提示をゆるされるならば、中國共產黨旅歐支部が正式に成立した日付は、一九二三年末から一九二五年初の一年餘りの間に想定されるべきではないだろうか。國民黨は、旅歐共產主義青年團との合作のもとに、一九二三年十一月二十五日、リヨンで、國民黨駐歐支部を正式に成立させた。共產黨の旅歐支部は、これに對應するかたちで設立されることになったのではないか、と筆者は憶測するわけである。その當否を決する材料は、現在のところまったくないが、アニー・クリーゲルによつて着手されたフランス政府文書の發掘がさらにすすめば、決定的な資料が提供されることもありうるかもしれない。

## むすび

かつて、『フランス勤工儉學の回想』に付した注釋の中で、未解決の問題としてのこしたフランスでの共產主義組織の成立について、從來の諸説に検討を加えたうえで、新發掘の伍豪執筆文書と若干の傍證によつて、ほぼ確實な史實を把握することができた。もちろん、本論で明らかにしえた事實は、李璜のとなえたコミンテルンの金錢のみを糸とする傀儡説を批判するため、必要條件ではありえても、決して十分條件ではない。筆者の觀點を補強するためには、フランス勤工儉學生の共產主義化の原因とフランスにおける共產主義運動の内實を、さらに詳細に分析する必要があるが、その一端はすでに「フランス勤工儉學運動小史」の第三、四章に開陳しているので、併せて御覽いただきたい。

筆者がおもに批判的とした李璜の回憶が、餘り信賴できないことは、いまや明白である。それは主として、共產主義に對



する反撥が意識的につくりだした歪曲であった。それと同時に、この分析を通じて明らかにになったことは、解放後の正統的な黨史、革命史も、フランスでの共産主義運動に關するかぎり、歴史學的努力をおこたつたという事實である。その背景には、唯一の資料たる體驗者たちの回想が、甚しい齟齬にみちていたという事情があるが、人間の記憶だけにたよらないことが、歴史學における常識の一つであるはずである。安易に先行の説に追隨する姿勢が、結局、諸説の混亂をもたらし、李璜の横行を許したことを思うとき、初期中國共產黨史の研究における正しい觀點と資料操作の必要性が、いまさらながらに痛感されるのである。

(一九七九年脱稿)

注

- (1) 以上、李璜「留法勤工儉學與中國共產黨」(一)『明報』第四六期(一九六九年十月)所收、一六〇—一九頁及び同(二)『明報』第四七期(一九六九年十一月)所收、一〇〇—一二頁。
- (2) 王章陵『中國共產主義青年團史論』臺北 國立政治大學東亞研究所 民國六十二年六月刊 四一—四八頁參照。
- (3) 李天民『周恩來評傳』臺北 黎明文化事業股份有限公司 民國六十五年一月刊 二四—二六頁參照。
- (4) 嚴靜文『周恩來評傳』香港 波文書局 一九七四年三月刊 五二—五八頁參照(竹內實譯『周恩來評傳』太平出版社 一九七五年十二月刊 七二—七八頁)。
- (5) 寺廣映雄「留佛勤工儉學運動について」—大阪教育大學歴史研究室『歴史研究』十一(一九七四年三月)所收 一六—一七頁參照。
- (6) 中國歴史博物館編『紀念周恩來總理』北京 文物出版社 一九七八年七月刊所收の第十六圖「周恩來同志赴法勤工儉學的介紹信」は、(一九二〇年)十月八日付である。胡華らは、十一月になってから上海を出帆したと記述している(胡華『青少年時期的周恩來同志』北京中國青年出版社 一九七七年十二月刊 七七頁)。
- (7) 李璜『學鈍室回憶錄』臺北 傳記文學出版社 民國六十二年七月刊
- (8) 七八—八二頁參照。  
したがって、フランスでの經歷が、果して一九三六年のインタヴューにもとづくものかどうかという疑問が當然生じる。スノーは、*Random Notes on Red China 1936-1945* で、この時のインタヴューについて一筆を設け、主に、蔣介石の評價に關する部分が、周恩來の依頼によって公表されなかった経緯を述べている。フランスでの經歷についても、同じ措置がとられたか否かは、いま判斷できないが、グローブプレス版の序文で、「他の人々の言葉を引用したり、傳えたりしている箇所では、たとえそれらが現在の、より信すべき情報と抵觸する場合でも、いわばアプリオリな歴史上の資料にみだりに手を入れるのを避ける意味で、概して原文の言い廻し通りに保持してある」(松岡洋子譯『増補改訂版 中國の赤い星』筑摩書房 一九七二年十二月刊 VII頁)とことわっているのをそのまま信じて、括弧のついている部分は、周恩來自身の語ったことばとしてうけとってさしつかえないであろう。
- (9) この中國語譯のもとになったと思われるものについては、グローブプレス版付録の略傳、毛澤東の項で、スノー自身が、その發表の経緯を述べている(松岡洋子譯 三八九頁參照のこと)。
- (10) 河田梯一・森時彦共譯『フランス勤工儉學生活の回想』岩波新書

一九七六年二月刊 二二三頁。

(11)

『先驅』第二十四號(一九二三年八月一日)所收の「關於旅歐中國共產主義青年團特殊職業議案」と「旅歐中國共產主義青年團提向國內大會的三個決議案」(五四時期期刊介紹)第二集 六二六頁)が、その記述の根據になっていると思われる。原文を簡単に紹介する。

前者は、「われわれ旅歐中國共產主義青年團は、すでに國內青年團の承認する旅歐部となった。われわれの特殊職務も、實に大會決定を請求する必要がある。そこで、われわれは以下の草案を大會に提出し、公決を待ちたい」と前置きした後、ヨーロッパにおける特殊任務を三カ條にしぼって述べている。

第一の任務は、「ヨーロッパの共產主義運動の實際に接觸し、その活動方法を考察、學習さらに紹介すること」、第二の任務は、勤工儉學生や華工など、フランス在住の「無産階級の少年」に主義を宣傳して同志を吸収すること、そして第三の任務は、解放運動の障害を除去するために、「人の思想をまどわす宗教(もともと顯著なのは、天主、基督兩教である)とその所屬のすべての組織(雷鳴遠屬下の教會學校と基督教青年會など)に反對」し、さらに「無産階級の少年の利益とまったく相反する中佛教育組織(例えば、リヨン中佛學院)に反對」すること、としている。

そして最後に、「以上述べたすべての職務を簡略にいえば、共產主義の教育工作、レーニンのことばを用いるなら、『共產主義を學習せよ』ということにほかならない」と結んでいる。

後者の方は、一九二三年八月開催の中國社會主義青年團第二回全國代表大會に向けた旅歐中國共產主義青年團の三つの提案である。

第一は、青年團の共產黨への從屬關係をはっきりと條文に定めること、第二に、青年團の中央執行委員會には、必ず黨が青年團員二人を選出、派遣し、その執行委員とすること、第三に、青年團の内部における教育工作では、厳格な規律と強制的な奉仕を實施することを提案している。

旅歐中國共產主義青年團の成立

(12)

波多野乾一の所説が、なにを典據にしているかについては、未詳。さらに廣範な文獻を調査する必要がある。なお、波多野は成立時期を明記していないが、別表では、「一九二一年になると、趙世炎や李立三は相繼いで莫恩科に去り」という一句から、趙、李が創立メンバーに数えられている以上、その成立は一九二一年以前と判斷して、「一九二〇年前後」と記した。

(13)

『中國新民主主義革命史』二七頁では、「周恩來、王若飛、蔡和森、李立三、李富春、羅邁、向警予等、又在法國巴黎、成立中國少年共產團」と、成立時期を明らかにしないで、「中國少年共產團」という名稱を採用していたのが、『中國革命史講義』では、「在法國巴黎中國留法勤工儉學會中、有周恩來、趙世炎、王若飛、李富春、陳延年、蔡和森、李立三、聶榮臻、蔡暢、羅邁、向警予等同志、也在一九二一年二月間、成立中國社會主義青年團」(四一頁)と、時期を明確にし、名稱を變更しているのであるが、そこにはまったく何の注記も施されていない。基本的には、「青年團歷史參考資料」(A-九)を参照した結果と思われるが、創立メンバーの點では別の参照資料があったと考えなければならない。

(14)

高田爾郎譯『中國革命の内部』三一書房 一九七六年七月刊 二二一頁。譯者の注記によれば、引用部分は、『續西行漫記』からの翻譯である。

(15)

蔡暢「永恆的記憶——哀悼王若飛同志」——『解放日報』一九四六年四月二十日所載。なお、この哀悼文は、華應申編『中國共產黨烈士傳』香港 新民主出版社 一九四九年十二月刊にも全文收録されている。

(16)

徐特立「回憶留法勤工儉學時代的若飛同志和齊生先生」は、「留法學生在一九二二年就有社會主義青年團的組織」と記すのみである。

(17)

松岡洋子譯『増補改訂版 中國の赤い星』三七頁。注(8)の判斷に誤まりがないことを前提にしての話であるが、スノーは百家坪でのインタビューでは、英語が使用され、スノーのノートを「周に讀み返して聞かせ、字句を訂正したり、明瞭な言いまわしに變え、また

微妙な表現を教えたりして、改訂稿を作り上げた」(小野田耕三郎・都留信夫共譯『中共雜記』未來社 一九六四年十一月刊 一一三頁)と述べているのであるから、引用部分の組織名稱なども、周恩來自身の表現と考えてもさしつかえないであろう。

- (18) 「旅滬湘省學生之歡送會」『時報』民國八年十二月二十四日所載、「關於留法學生之紀載」『時報』民國八年十二月二十六日所載および「五四」時期湖南新文化運動的部分資料」『湖南歷史資料』一九五九年第四期所收 六九頁。

- (19) 以上、何長工 前掲書 一三八～一四〇頁。

- (20) 工學互助社の詳細は、拙論「フランス勤工儉學運動小史(下)」『東方學報』第五十一冊所收 三八四～三八七頁を参照されたい。

- (21) 施華「參觀周恩來紀念展覽」および「周恩來紀念文物選刊」『七十年代』第九十期(一九七七年七月一日)所收。

同時に掲載された「旅歐中國共產主義青年團章程」については、前掲拙論 三九七～三九八頁参照のこと。

- (22) 胡華『青少年時期的周恩來同志』北京 中國青年出版社 一九七七年十二月刊 九三頁。

- (23) 同前 九五～九六頁。

- (24) Weger Chine Moderne Tome VI p. 87 の資料集は、大部分がかなり意譯のすぎるフランス語譯がなされているが、キーワードおよび固有名詞などには、漢字がそのまま付されていることがある。引用部分についてこそ、le Groupe des Jeunes Communistes chinois には「旅歐中國共產主義青年團」が付されているが、Parti communiste des Jeunes chinois, Groupe des Jeunes Socialistes chinois の二つにはなにも付されていない。これらは、筆者の判斷で「中國少年共產黨」、「中國社會主義青年團」と譯した。

- (25) それも、果して例外といえるかどうかかわからない。すなわち、洪煥椿『五四時期的中國革命運動』は、「國外如法國勤工儉學的中國青年、也組織了研究馬克思主義的團體、其中最主要的兩個團體是工學

世界會和勞働協會。後來由勞働協會發起、于一九二二年二月間建立共產主義研究會和中國少年共產團」(一六六頁)と述べ、マルクス主義研究團體としての工學世界會の存在を指摘しているが、これが蔡和森らの工學互助社と同一物をさすかどうかは判斷できない。包振宇「一般在法華工、學生、商人的組織和建設」(湖南大公報一九二〇年十一月十三日原載。タイトルは異なるが、『時報』一九二〇年十月三十日、十一月三日にも掲載)の中に、「工讀世界社」なる團體がみえる。湖南歷史考古研究所現代史組は、「工讀世界社はもとの『工學世界社』である」(『湖南歷史資料』一九五九年第四期六四頁)という校注を付している。洪煥椿のいう「工學世界會」はむしろ、こちらに近い名稱である。もっとも、工學世界社は、マルクス主義研究團體などではなく、湖南出身の勤工儉學生、張昆弟、李林君らが組織した實業救國路線の團體であった。

- (26) 司馬路は、この筆者の觀點とほぼ同じ立場から、洪煥椿らの説を批判している(司馬路著『中共の成立與初期活動』中共黨史暨文獻選粹第二部 香港 自聯出版社 一九七四年六月刊 一〇三～一〇九頁)。

- (27) 吳玉章「憶趙世炎烈士」『人民日報』一九六二年七月十九日所載も、この感を深くさせる。「到一九二二年二月、他(趙世炎)已是旅法共產主義小組的成員之一。黨成立後、他是黨中央駐巴黎的通訊員。一九二三年、他和周恩來等同志組織了旅歐中國少年共產黨(後改名旅歐共產主義青年團、亦即中國社會主義青年團旅歐支部)」。旅法共產主義小組が工學互助社をさすものであるとすれば、われわれの得た事實にはば等しい。そのよるところは、いま明らかにしない。

- (28) この判讀は、基本的には中國歷史博物館編『紀念周恩來總理文物選編』一三頁の圖版を擴大した寫真によっているが、一部、周恩來總理紀念展覽を實際に參觀された林原文子氏の「教示をあいだ。

“旅歐中國共產主義青年團”

(中國社會主義青年團旅歐之部)

報告第一號

一九二三、三、一三、於巴黎

“中國社會主義青年團”中央執行委員會諸同志

我們旅歐共產主義少年團體在去年十一月二十日曾以“旅歐中國少年共產黨”名義與同志們去過一封公信誠懇地聲明我們願付屬於國內青年團爲其旅歐之部同時並向團中建議三事、此信當由同志李維漢(羅邁)携帶回國、並委他爲旅歐少共的代表、向團中正式接洽、計時當已達到。

羅邁行後我們在此靜待好長期中、忽得到中國赴“共產國際”和“少年共產國際”的代表已抵赤都的消息、由不得我們不立即去信表示我們誠懇的敬意、同時並切實聲明我們此間團體加入國內青年團一案、亦已正式提向國內毫無猶疑、其後代表團由重輔同志復我們一信、希望我們“旅歐少年共產黨”改名爲“中國共產主義青年團旅歐之部”、在此名稱組織之下而稱的“中央執行委員會”應改爲“執行委員會”、同時並指示我們對於團中綱領的誤解和在歐行動的方畧、我們在今年一月得着這封信後、益覺我們團體的名稱組織有急於改(第一葉終り)

(29) 胡華『青少年時期的周恩來同志』九六頁。

(30) 胡華『周恩來總理旅歐時期的革命活動』『北京師範大學學報』一九七八年第一期(二月二十一日)所收 一八頁。

(31) 何長工『回憶旅歐期間的周恩來同志』『周恩來總理八十誕辰紀念詩文選』北京 人民出版社 一九七八年九月刊所收 一七二頁。

(32) 林代昭『馬克思主義在中國的傳播和周恩來同志』『北京大學學報』一九七八年第二期(八月二十日)所收 一〇頁。

(33) 廖永武『周恩來同志旅歐期間的革命活動』『天津師院學報』一九七八年第一期(一月三十日)所收 二二頁。

(34) 中國歷史博物館編『紀念周恩來總理文物選編』一一頁。

旅歐中國共產主義青年團の成立

(35) 廖永武 前掲論文 一二頁。

(36) Wiegner China Moderne Tome IV p. 451 「在法以前之各種黨派、如工讀社、覺悟社、無產階級共產黨、華工會、現已合而爲一、名曰(留歐中國共產黨青年團)」。

(37) この資料については、前掲拙論 三九五〜三九六頁も参照のこと。フランスの共產主義組織が、どのようなルートで、國內の組織との連絡をつけたかという問題についても、從來多くの異説があった。李昂『紅色舞臺』(A—五)では、「この團體(中國少年共產黨)は、……最初は中國共產黨に屬していなかったが、趙界炎がモスクワで陳獨秀に會ったのちになつて、はじめて中共に隸屬することを決定し、『中共旅法支部』と改稱した」と述べ、モスクワにおける趙世炎と陳獨秀の會見という説を提示した。その後、この説はさまざまに潤色されて流布し、中國國民黨中央組織部調查科編『中國共產黨之透視』臺北 文星書店 民國五十一年二月刊もこれを踏襲している。また Howard L. Boorman ed. Biographical Dictionary of Republican China Columbia U. P. 1967 の趙世炎の項などでは、一九二二年冬、クートヴェに留學した趙世炎、王若飛、陳延年らが陳獨秀と會つて、改組を決定したとされている。このように誤まった説が多かつた中で、周恩來の回憶が、「われわれの共產主義青年同盟は一九二二年に上海に代表團を派遣し、その前年創立した黨への加盟を要請したのです」(松岡洋子譯『増補改訂版 中國の赤い星』三七頁)と述べ、李天民が「この年(一九二二年)冬、かれ『趙世炎』は、モスクワにいた陳獨秀と通信し、少年共產黨を中國共產主義青年團と改稱することを決定した」(李天民『周恩來評傳』二六頁)と分析しているのは、「報告第一號」の内容と、それぞれ比較的良好に合致している。

(38) 中國歷史博物館編『紀念周恩來總理文物選編』一一頁。

(39) 何長工『回憶旅歐期間的周恩來同志』一七二頁。

(40) 廖永武 前掲論文 二二頁。

(41) 胡華 前掲書 九六〇九七頁。

(42) 廖永武 前掲論文 一三三頁。

(43) 「青年團與黨之關係」——「赤匪反動文件彙編」第一冊 民國二十四年刊二八六頁。「四、沒有團而有黨的地方、黨應指定黨員（兼團員）建立團的組織、同樣沒有黨而有黨的地方、團也要負責把黨建立起來」。

なお、この文件には、「一九三三年八月舉行的偽團第二次全國代表大會、決定了團與黨的關係」というコメントが付されている。

また、この第二次全國代表大會に先立って、『先驅』第二十三期（一九三三年七月十五日）に掲載された光亮署名の「本團與中國共產黨之關係」と題する提案の中でも、「可是實際有一個困難問題、就是沒有共產黨支部的地方（例如成都、太原、衡州等處）、本團的地方團事實上不能不擔任共產黨應做的工作並且有的還須以共產黨的工作為主」という記述がみえ、當時共產黨支部がなかった處では、青年團がその代行をしていたという事例を提供している。

(44) 以上、李雲漢『從容共到清黨』臺北 中國學術著作獎助委員會 民國五十五年刊 一六一〜一六二頁。

(45) 任卓宣「旅法華人反帝國主義運動與留法青年黨的告密」——『嚮導』第一三三期（一九三五年十月十二日）所收 大安復刻版通頁一二二九頁。

補足

脱稿の後、王永祥・劉品清「周恩來同志青少年時代革命活動年表（一九八一—一九二四）」、唐鐸「五四運動時期參加留法勤工儉學有關情況的回憶」（以上、『遼寧大學學報』一九七九年第二期所收）、何長工「要為真理而鬥爭——記留法勤工儉學中的陳毅同志」、陳孟熙「擊石有待于刀斧——憶陳

毅同志勤工儉學前後」（以上、『人民的忠誠戰士——緬懷陳毅同志』上海人民出版社一九七九年一月刊所收）、懷恩「周總理的青少年時代」四川人民出版社 一九七九年四月刊、張至皋「活躍在「五四」時期的四川留法勤工儉學的青年」（『成都日報』一九七九年五月二日所載）等を眼にすることができた。

陳孟熙の回憶と張至皋の論文が、いままでほとんど知られていなかった四川におけるフランス勤工儉學運動について、多くの新しい事實を提供しているほか、懷恩の大作は、數年來、中國で精力的に進められてきた周恩來の青少年時期に關する珍しい調査をふまえ、フランスでの活動についても周到な記述を展開している。

當面の問題でいえば、第一に、旅歐中國少年共產黨の改稱時期については、懷恩の傳記（二六九頁）ばかりでなく、王永祥・劉品清共同執筆の年表（一七〜一八頁）も、本文中で提示した筆者の假説と、完全に一致する見解を示している。

ところが、第二の中國共產黨旅歐支部の成立時期に關しては、王永祥・劉品清の年表、懷恩の傳記および張至皋の論文、いずれもが何長工の説を支持して、「一九三三年八月、黨中央の決定をへて、『中國共產黨旅歐支部』が成立した」（懷恩 一六九頁）と主張する點で、一致している。中國では、中共旅歐總支部の一九三二年八月成立説が定着しつつあるようである。何か有力な根據が存在することを暗示しているようにも思われる。しかしながら、筆者が本文中で列擧した疑問に對して、これらの論者も、何長工の回憶と同様に、十分な證據によって答えるものではない。したがって、現在のところ、一九三三年末から一九三五年初にかけての間に、中國共產黨旅歐總支部が正式に成立したのではないか、とした筆者の推測は、まだ撤回する必要はないと考える。